

## 辺野古新基地建設阻止へ

## 沖縄の人々と連帯し、建設を許すな！

全国一般東京労組・全労沖縄派遣団からの報告

辺野古ゲート前テントを守りきる！創意工夫の闘いに希望！

私たちは2月25日から28日まで、東京労組、全労合わせて5名で辺野古テント撤去期限が迫る現地闘争に参加した。新聞輸送分会では職場で呼びかけカンパを募り代表として2名の仲間を送ることを決定し、参加することができた。

2月25日(水) 快晴

午前中、摩文仁の丘、アブチラガマまで見学した。摩文仁の丘を登ると自衛隊員が牛島満の碑の前で研修中。牛島満の略歴を話したあと「彼がいたから90日間ももった」などと説明していた。

沖縄では本土決戦に備えたその90日間で20万人を捨て石としたのではなかったか。その後本土への大空襲、広島長崎への原爆投下を招いたのは、そんな上部の英雄譚ではないのかと、その思い上がりに嫌気がさした。暗い気分で売店に立ち寄ると、オーバーが「何処から」と聞いてきたので、先程の事もあり「東京です。辺野古に基地反対で行ってきます」と言うと「これ持っていきなさい」とさんびん茶をだしてくださったので涙が出そうになった。こんなオーバーからも思いを伝えられ、その場で沖縄笠を買って辺野古へと。

2月26日(木)

ゲート前は空は明るくなるものの風が吹き、正午から雨足が強くなるようだ。キャンプシュワブゲート前では、毎朝基地建設のための工事車両、海保と防衛省職員を入れさせないための車両を止めての攻防が続く。ゲート前をデモして簡単な集会が行われる。このようなスタイルを風雨の時も毎日235日間続けられている。

今日がテントの自主撤去の期限のため、テントをどうするかを巡って昨日から対岸の緑地帯に移動することを決めるも、国交省職員がテントを設置するこ

とを阻むための柵を作るので、資材だけシートで覆われている。テントは、日夜の車両監視の為市民の安全を守るために作られた辺野古の闘いの象徴のようなものだ。それを権力による一方的な指示のもとに撤去せよ、さもなくば強制撤去をちらつかせる傲慢さとは生命の安全とは対局にある基地そのものの態度といえそうだ。国土交通省の役人との交渉決裂だ。緑地帯に作業員たちが立ち入れないようにフェンスを張る前に、私たちがフェンスを横断幕で埋め尽くしテントを設置し、対峙しようとなり、全面的な対決となる。

午後、降りしきる雨の中、私たちは第三ゲートまでデモをする。第三ゲートからは海上での工事の様子も一望でき、カヌー隊への激励コールができる格好の場所だ。ゲート入り口には、何者かが一般道に勝手な茶色で進入禁止ラインを引いている。法による進入禁止ゾーンが、誰を侵入させないものなのか、このラインからも垣間見えてくる。

本日は沖縄県が辺野古の海底調査をしている最中。工事によって珊瑚への損傷の可能性があれば知事による工事の中止を決定する。しかし政府は、県が海底調査を実施しているにも関わらずボーリング調査用の超大型スパッド台船をむかわせているという。沖縄の民意をお構い無く踏み潰していく中央政府の驕りが透ける。

一旦宿に帰る前に、座り込みに参加されていた、韓国から来たという方も話げできた。かれらは、韓国済州島はカンジョン村(江汀村)で基地建設に反対している若者たちで「軍隊のない平和な (裏面に続く)



## （表面から）

東アジアを作りましょう」と話していた。夕方には国土交通省職員がやって来て「口頭での指導」としながら本日までに撤去しなさいと言ってきた。午前0時をもってテントの撤去期限だ。テント前で緊張した面持ちで待ち構えていると、国交省職員が道路を二手に別れてやって来た。

夕方以降、職員は度々このように回ってくるのだが、今回は違いそうだと言った現場の皆の息使い、緊迫感が伝わってくる。私たちは隣の間人とスクラムを組んで待ち受ける。しかし、職員たちはそのまま引き返す。

その日は、総勢 70 名以上の体制で夜を徹してテントを守っている。山城ヒロジさんの司会で全国から来てくれた学生たちが発言していたが、それぞれが率直な思いを発言され勇気を頂いた。山城さんが「もっと沖縄の間人がビールなんて飲んでないで駆けつけるべきだ」と発言すると、学生からは「むしろ沖縄の人たちに本土の私たちが基地を強いている事を思うと、そんな発言をされて申し訳ない」と発言があり、沖縄と本土の人々の違いも、そして若者が未来に繋げようとする希望も見える思いだった。

沖縄で選出された糸数国會議員や沖縄の反基地建設の意思を持たれている議員らも夜を徹していた。 2:00 頃宿に戻り仮眠する。明朝が山場か。

## 2月27日(金)

ゲート前は若干風がふき、朝から冷え込む。7:00 頃から機動隊のカマボコ車両二台がゲート前に入り緊迫したまま朝を迎える。そして今日は何時にもなく米軍の装甲車両が通る。ライフルをも携行したバスが平然と国道を通行する。通行する米軍車両にも「ノー ベース」「ゴーホーム」と沖縄の人々の怒りが叩きつけられる。

全国から届き、支援の輪で生活してきた物資だけでも、と緑地帯に設置されたテントも両方とも撤去となりそうだ。そういえば、昨日の沖縄タイムスでは、米高官が 1 月上旬に抗議運動の排除を主張していたと。22 日の二人の拘束の後にはわかったとの事。

アメリカの辺野古反基地住民運動へのあからさまな弾圧指示と政府による地元官僚を呼び出して発破をかけて、今日に至るといふことか。座り込む人たちの「来るなら来い！」という思いがひしひしと伝わってくる。これでも撤去をするならば沖縄県民の総意を敵に回してでも構わないとする暴挙だと山城さんの発言が響きわたる。ヤツラは本気だ。しかし、沖縄の人達の強さを日々感じる。

結局、撤去期限が過ぎた今日の空白の時間。何時も朝や夜、人手が少ない時に襲ってくるのだが、そんな感じもなく一日が終わろうとしている。

## 2月28日(土)

米高官の排除発言は、米高官自らが一転し発言を否定、菅官房長官までもが排除を指示してないという始末。現場では、国交省職員数人が 24 時間体制でテントを監視していたが、疲弊していると職員自らが漏らしていると今朝の琉球新報。

国交省職員がひっきりなしに来るので、私たちは逆にジュゴンやプラカード、太鼓を手に手に職員に同行するというユニークな創意工夫のデモでお出迎え。流石にこれは、命令一下でロボットのようにさ迷う国交省職員を意気消沈させてしまったのも無理はない。

昨日の夕方、外れの方まで行くと職員一人がうな垂れていた。見ている私たちを気にしたのかスックと立ち上がったので「無理しないでね。あなた一人の身体じゃないんだよ」と声をかけると辛そうに笑いかけられる。政府が発破をかけ、現場では奴隷のように使われた職員が疲弊していく。

職員も公僕である前に人間だ。職員の疲弊感を見ていると、海保とカヌーで渡り合い沖縄の人々を味方につけた粘り強い抵抗闘争があるからゲート前のテントが守られているのかなあと実感する。

237 日目の朝、そんな思いで辺野古をあとにした。

辺野古には沖縄の未来だけではなく、世界にも通用するカネではなく人間が主人公の社会の姿があるように感じた。そして多くの方々にカンパや励ましを頂きました。その力は、辺野古の行動に合流する皆の力となりテントを守り抜くことができました。ありがとうございました。

28 日以降は辺野古現地に通ってらっしゃる東京労組の石原さんにバトンを託してきました。（全国一般・全労 庄子正紀）

## 沖縄辺野古新基地建設阻止に向けて

### 全労協派遣団、現地物資支援を継続するためにカンパの集中を!

沖縄では「辺野古の海カヌー隊、キャンプシュワブゲート前座り込」など必死の闘いが続いています。各労組では派遣団や物資の支援、各地の基地反対闘争など様々な取り組みが闘われています。

5月15日～17日にかけては平和行進も取り組まれます。全力で連帯していきましょう。

全労協は新基地建設阻止に連帯するカンパを取り組んでいます。御協力をお願いいたします。本部事務局までお問い合わせ下さい。